

A Way of Life

—Seko Koichi—

23号

平成29年3月

世耕弘一先生建学史料室広報

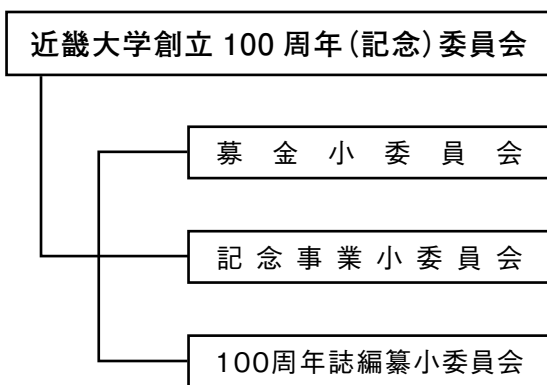
創立一〇〇周年(記念)委員会に

「一〇〇周年誌編纂小委員会」が発足

副学長・建学史料室研究員
一〇〇周年誌編纂小委員会委員長
増田 大三

平成三十七(二〇二五)年の本学創立一〇〇周年に向けて、昨年四月、創立一〇〇周年(記念)委員会が発足し、続いて「募金小委員会」「記念事業小委員会」「一〇〇周年誌編纂小委員会」の三小委員会が十月に設置されました。

一〇〇周年誌編纂小委員会の使命は、学内外の関係者をはじめ多くの方々に、本学の発展、教育・研究・課外活動等に関する歩みに触れてい



ただく手がかりとして幅広く活用していただけるよう、紙媒体だけでなく、二十一世紀の中心となる広報媒体を活用し、全く新しい発想による記念誌を創ることにあります。

膨大な資料から史料を抽出、整理していく作業を進めていくことになりませんが、これにはデジタルアーカイブシステムの導入が最善ではないかと考えています。これが実現できれば、業務の効率化、ペーパーレス化に加えて、デジタル化した史料はWEB上に公開できますし、一〇〇周年後の学園の発展についても加えていくことができ、その用途、利便性は大きく広がっていきます。

ただ、この使命を果たすためには、各学部、附属校、中央図書館、総務部、広報部、学生部、管理部、建学史料室などと緊密に連携・協力して、各部署で収集・保存されてきた史料を積極的に活用していかなくてはなりません。さらに、卒業生・元教職員を含む学内外の関係者の方々に改めてご協力をお願いし、本学の歩みを活写する史料を幅広く収集し、編纂していきます。

次元の違う独自性を持って、社会に役立つ大学になることを標榜する本学にふさわしい成果を残せるよう、小委員会メンバーの創造的英知を結集してまいります。

建学史料室からのお願い

▼史料収集

世耕弘一先生、政隆先生、弘昭先生ご生前の関係史料(出版物、書簡写真、録音テープ、ビデオ、その他何でも結構です)を、現在もお手元に保管されている方々に、その関係史料のご寄贈又は複製でのご提供を賜りたく、当史料室では広く皆様方にご協力をお願いしております。

詳細につきましては、史料室へご一報いただければと思います。

▼ホームページ

不倒館の開館日・時間は、近畿大学ホームページ「不倒館」創設者 世耕弘一記念室」のサイトでお知らせしております。

近畿大学ホームページのトップ右下にある「不倒館 創設者世耕弘一記念室」を選択してください。

▼ご意見感想をお待ちしています

本誌や不倒館ホームページへのご感想やご意見をお寄せください。お寄せいただいたお便りについては、今後の本誌などの編集に役立てさせていただきます。また、こちらからお問い合わせをさせていただく場合や、広報誌の中でお名前とともにご紹介させていただきますことがありますので、あらかじめご了承ください。



70年前の近畿大学について知る

近畿大学をめぐる史資料 7

日本私立大学協会・

日本私立短期大学協会共編

『全国私立大学・短期大学』

一入学案内一 昭和27年度版

短期大学部教授

建学史料室研究員 井田 泰人

入手の経緯とその内容

今回、日本私立大学協会・日本私立短期大学協会共編『全国私立大学・短期大学 一入学案内一 昭和27年度版』（日本私立大学協会・一九五二年・二三九頁・B6判）を紹介する。資料の入手について少し言及しておこう。元々、この文献は大阪商工会議所の所蔵図書であった。商工会議所は少し前に書架の整理を決めた。研究・執筆に活用していただけなのであれば、お持ち帰りください」というのが同所の姿勢であった。筆者は「図書の保存は重要。廃棄するのであるならば頂こう」と考えており、「寄贈」して頂いたのである。

同所の所蔵図書の多くは経済・産業・商業・経営に関するものである。一部、これらの範疇に入らない図書もあり、同書は「教育」に分類されるものといえる。その内容は簡単に言えば、受験生向けの「大学紹介」である。同書を頂いた理由は、昭和二十七年という時期に魅力を感じたからである。戦後の教育基本法、学校教育法が昭和二十二年（一九四七）年に制定され、その五年後に発行された文献であり、今から六十五年前の様子を知れる。日本は復興の過程にあり、まだ高度経済成長に至っていない時期にあった。当時の私立大学・短期大学がどのようなものであったのかということ、大いに関心を引き起こす。

同書では所在地、建学の精神、沿革、学長・理事長、開設学部、募集学年・人員、受験料・入学金・授業料、入学資格、特典、寮、学友会などの項目に沿って全国の私立大学・短期大学が紹介されている。

近畿大学の紹介

近畿大学については「大学の部」の四二―四三頁に紹介されている。「建学の精神」の項では「気魂をみがき、智徳を修得せしめ而して各々具われる個性の特長を育成せしむ」と記されている。当時の首脳陣は、総長・世耕弘一、法学部長・末包留三郎、商学部長・池田実、理工学部長・平尾子之吉、短期大学部長・太田亮であった。

また、「経済、農、水産各学部の

増設計画中である」と記され、「化学研究科」、「商学研究科」の「大学院」の設置申請中の記述もみられる。着々と拡大していく様子が窺える。さらに、「高等学校、中学校、幼稚園を擁し、総合大学として教育の一貫性を期している」とも記し、今日で言う「総合化」、「中高一貫」、「高大連携」への方向性が確認できる。「特別講座」の項目には、次の四つを挙げている。①教職課程を置き、教員免許状を下附する。②医学部、歯学部進学課程を設けている。③仏教講座を設け学生は固より一般に公開している。④其他自動車操縦技術講習、タイプライター講習、速記講習等を設け新時代の要求に応えている。

「資格取得・実践的技能修得の支援」、「多彩な進路」、「門戸開放」が確認でき、魅力的な教育体制が確立されていた。

その他、「附属機関及び施設」では、当時の本学には、世界経済研究所、生産科学研究所および東京食品工場、臨海研究所および養魚場、映画教室、診療所、出版印刷部が設置されていたと記している。

短期大学部の紹介

「短期大学の部」に移ると、一八八頁に本学短期大学部の記述がみられる。「建学の精神」の項には、「学問は学問の為であってはならない。必ず現実の裏づけがあり、学理と実際とは形影の相伴うものでなくてはならぬ。この信念から本学は実際社会

に役立つ高い教養と知識をもつ實際教育の徹底を建学の精神としている」とあり、現在の「実学教育」を意味する内容を掲げていた。先の四年制大学の記述とは異なっている。当時は四年制と短大とで共通のものが設定されていなかった。

他に「実学教育」を示すこととして「教授も学究として又実務家としての各界の権威多数を選任教授として有しこれが実現を期している」とあり、スタッフの採用においても配慮されている。

さらに注目すべきは、「卒業者は近畿大学編入の途」がありという「利点」を強調していることである。今日、本学短期大学部の多くの学生が経営学部をはじめとする四年制大学への編入を主要進路としているが、六十五年前から、その基本路線が敷かれていたようである。

先の「特別講座」は四年制学部とほぼ同様のものが受講できた。「短大でありながら、四年制大学のサービスを受けられる」という「総合大学のメリット」を十分に供与できており、この点は今日の様子と変わらないことである。

以上、同書から六十五年前の近畿大学の様子を確認することができた。戦後、教育制度の改革が進められる中、いち早く「総合化」を目指し、今日の建学の精神の一つである「実学教育」を実践してきた。当時の世耕弘一先生をはじめとする首脳陣の先見の明に驚かされる。

世耕弘一先生のドイツ留学に関する史料から

近畿大学名誉教授 建学史料室研究員 荒木 康彦

はじめに

世耕弘一先生のドイツ留学九十周年を記念して平成二十五年十二月二日から同月七日まで開催された史料展示会では、同年夏季休暇直前頃迄に採取出来た主な史料を、詳細なキャプションを付して、悉く展示したのであった。そして、その後も貴重な一次史料等を発見しており、今回は、そうした史料の中で特筆すべきものであるが、分析未終了等の理由で未だ本広報誌に掲載出来なかつた、先生のドイツ留学に関する史料を取り上げてみたいと想う。

それは、次に掲げる通りである。先生のドイツ留学出途直前の大正十二年八月八日に催された「送別宴」に関する史料

先生がドイツ留学から帰国された年、即ち昭和二年に上梓された御著書『*Seitliche Spindel = und Stillfahre* 獨逸語並に文體論』の近畿大学中央図書館所蔵本

1

世耕弘一先生の「ドイツ留学の思い出」に依れば、恩師の山岡萬之助先生から「大正十二年四月末」に「ドイツ留学の内命をうけた」¹のであったが、その結果、留学へ出発する迄

に次の二つを処理されねばならなくなつたと推察される。その一つは同年就職されていた朝日新聞社との関係の調整であり、もう一つは旅券の取得であった。この両点についての史料は平成二十五年の史料展示会で展示したので、ここではその内容を簡単に明示するに止めたい。

前者は朝日新聞本社『自大正十一年至大正十五年 社員異動簿（大阪 東京）』²所収の「世耕弘一」の欄である。即ち、大阪・東京朝日新聞本社の大正十一年から大正十五年までの人事異動に関する記録の大正十二年の部分に、世耕弘一先生に関する次のような内容の史料が収録されているのである。「發令月日」には「大阪朝日新聞社総務局文書課 [211]」のスタンプが押されており、「給与」は「報酬無シ」、「氏名」は「世耕弘一」、「辭令」は「在歐中通信ヲ囑託ス」、「所属」は「私立日本大学独乙留学生」、「職名」は空白、「通知」は「/」となっており、「備考」には二人の署名がある。従つて、出身大学のドイツ留学生としての世耕弘一先生が、大正十二年七月十一日に朝日新聞社から報酬なしでヨーロッパ滞在中に記事を送るのを委託されたことを示している。

後者の旅券取得の爲には、当然旅券申請が必要であり、この当時、旅券申請の際には外国旅券下付願、戸籍抄本、本人の上半身の写真二葉を道府県に提出することになつており、旅券手数料は移民の場合は五円、移民でない場合は十円となつていた³。故に、世耕弘一先生は、外国旅券下付願、戸籍抄本、上半身の写真二葉、旅券手数料十円を当時の東京府に提出されたと推察される。外務省は申請に従つて旅券を交付し、その結果を「海外旅券下付表」なる一覧表に纏めている。その「二一八卷 大正自十二年七月至九月」⁴の「東京府」の部分の十九枚目裏に先生の項目がある。「旅券番號」は「五四九八三一」、「氏名」は「世耕弘一」、「身分」（ここで言う「身分」とは、戸主との続柄のことである）は「戸主」の「弟」、「本籍地」は御出身地、「年齢」は「卅年六月」、「保証人」はこの時代は不要で空欄、「旅行地名」は「香港、新嘉坡、馬按加、彼南、古倫母、蘇土、坡西土、佛、瑞、獨」、「旅行目的」は「學術研究」、「下付月日」は「八月三日」となっている。

以上から、大正十二年七月から八月初頭にかけて、右記の二点のことを処理されて、世耕弘一先生のドイツ留学の準備は万端整つたと推察されるのである。そうした八月初旬に、恩師の山岡萬之助先生が中心になつて、「送別宴」を催したのであった。大正十二年八月十三日付『日大新聞 第三十三號』に掲載された「ベ

ルリンの秋風に赤毛布を翻すべく留学生數名袂を揃へてドイツへ 盛んなる有志の送別宴」という長い見出しの記事⁵に、同年八月八日に西洋料理店の「富士見軒」（東京市麹町区富士見町一ノ二十九）⁶で催された「送別宴」に於ける世耕弘一先生の言動が、詳しく報じられているのを発見した。そこから先生のドイツ留学への意気込みも知られ、洵に貴重である。それを掲げると、次の通りである。但し、振り仮名は、便宜上、省いた。又、この記事には「留學生諸君送別のつどひ」と題する集合写真も併せ掲載されており、撮影の時・場所が明確であるが、如何せん、非常に不鮮明なこともあり、省いた。恐らく、この集合写真の前列の向かつて右から三人目のモーニング姿と判断される人士が、世耕弘一先生であろうと想われる。

午後六時開宴などと云つても、時を蹂躪して平気な連中、なかなか落ちついたもの電燈がかゞやき涼風來り宴を開く前に記念撮影を一同カメラの前に集まる。けふ送らる、側の一人：然もその花形たる世耕君來らず。みんなで噂をしてゐる所へモーニングに威容を正した同君流る、汗を拭いもあえず馳せつけて、洋行帰りかと思はる、やうな様を寫眞に収める八月八日の夜を、九段富士見軒に我が大學留學生小林錡氏（獨逸法律學）世耕弘一氏（獨英政治經濟

學) 井口正一氏(獨逸保險信託) 柏木吉太郎氏(米國經濟學商學) 清水一夫氏(歐米視察)の諸君の行を盛んにすべく、有志が集まったのである……(後略)

写真撮影の後に、山岡萬之助先生が挨拶を為したのであるが、その後のことは、「ピアノとダンスと語學を専攻して序に經濟學をも 三人前主義の世耕君」という小見出しが付けられた記事で、次のように活写されている(●は印刷が完全に潰れていて残念ながら判読不可能の部分であり、○は脱字部分である)。

山岡理事の後をうけて送られる方の側の學監小林錡氏起ちて謝辭を述べ、榊原氏の所謂玄關のみに止まらず台所の隅々に至るまで徹底的○研究して来るつもりであると頗る真面目なもの。リュウとした●装に見ちがえるばかりの世耕君●顧みるにわが帝國は維新以來：「と大きく出て、私 はあちらへ行つたらピアノとダンスとそれから語學を大にやるつもりです。經濟學はそのつけたりにとやるか、一體 私は學生時代から三人前の仕事をやる主義であつたが、今度も本學の留學生と、朝日新聞及び文部省の兩方に關係してゐるのでやはり三人前をやつてのける私の通信が朝日に出たのを御覽下さらば幸に世耕やつてゐるなど思つて頂きたいと拍手を浴びる。

(後略)

世耕弘一先生は巧みにユーモアを交えて、留學に向けての抱負等を語つておられるので、それを纏めると、以下の通りである。

- (1)「ピアノとダンスとそれから語學を大にやるつもり」で「經濟學はそのつけたりとやる」こと。
- (2)「學生時代から三人前の仕事をやる主義であつた」こと。
- (3)「本學の留學生と、朝日新聞及び文部省の兩方に關係してゐるのでやはり三人前をやつてのける」こと。
- (4)「通信」を朝日新聞に寄稿するつもりであること。

先ず、(1)についてであるが、「經濟學」を「つけたりとやる」、つまり単に學術研究をやるだけではなく、「ピアノとダンス」、つまり芸術・文化や社会にも広く目を向けるという比喩と解釈する必要がある。世耕弘一先生が「經濟學」を「つけたりとやる」とされているが、第二次世界大戦後の昭和二十二年に隠退蔵物資等処理委員会副委員長として、隠退蔵物資摘発を精力的に実施した経験を踏まえて発表された論説「隠退蔵物資摘発の真相」では、第一次世界大戦後のドイツのハイパー・インフレとドイツ政府によるその対策を留學中に考察したことに基づいて、第二次世界大戦後の日本のインフレを克服せんとしたとして、次のように第一次世界大戦後のドイツ經濟考察の一端を披歴しておられる⁷⁾。

(前略) 私は第一次歐洲大戦直

後ドイツに行き、僅か二十四、五億圓の金銀其他を供出することによつてレンテンマルクという新札が発行され、あの恐ろしい天文學的數字と稱されたドイツの大インフレが一夜のうちに片づいてしまつたことは目の前で體驗しているのである。

もし、われわれが隠退蔵されたダイヤモンドにより、金銀塊により、そういうような手を打つことができれば日本のためにどれだけの幸福だかわからない。隠退蔵物資の處理がインフレ克服にどれほど深い關係をもつかということ、皆さんは深く認識して貰いたい。(後略)

「經濟學」を「つけたりとやる」と言われているが、第一次世界大戦後のドイツのハイパー・インフレとドイツ政府によるその対策を先生は仔細に研究されたと見做すべきなのである。

また、「語學を大にやるつもり」という点については、大いに刮目しなければならぬ。と言うのは、世耕弘一先生の「ドイツ留學の憶い出」に依ると、「プリル」(Emil Prill 1867-1940) という教授の自宅を頻繁に訪問して、同教授からの教えから多くを学び、「ドイツをよく見てゆくことと、ドイツ語をしっかりとやっておくことが一番大切だ。ドイ

ツという国とドイツ語をしっかりと覚えてゆけば、日本へ帰つてから何年経つてもドイツの本が読めるだろう。」⁸⁾ というドイツ「留學の秘訣」を授かり、留學中は忠実にそれを実行して、「主として本を読むことを中心にして」。勉強した、とされているからである。留學中は「語學を大にやるつもり」との方針を心中深く抱懷されていた世耕弘一先生にとって、同教授のこのアドヴァイスは、我が意を得たりという想いであつたらう。ドイツ留學から戻られた年に御著書『Gutschke Spindt = imb Stilleke 獨逸語並に文體論』が上梓されていることから、充分に所期の目的が果たされたというべきである。尚、本書については、後段で改めて触れたい。

それから(2)は世耕弘一先生のドイツ留學に直接關係しないことであるが、これに関連する非常に興味深い史料を見出している、それについて言及しておきたい。

『日本法政新誌』第十六卷第六号(大正八年刊)を閲覽していたところ、その巻末部分で世耕弘一先生の御名前に遭遇した。日本大学で大正八年五月十八日に開催された「春季雄辯大會」での演題及び弁士の一覧に「所感 世耕弘一」という形で掲載されていた。そこで、恰も「匍匐前進」するが如く、徐に同誌の閲覽出来た他の巻も精査した。そのような調査の結果、雄弁会での先生の足跡をかなり克明に辿ることが出来

た。それらはいずれも断片的で多数あるので、期日・場所・演題という形で羅列すると、世耕弘一先生の雄弁会に於ける御活動は、以下の通りである（演題以外は現用漢字で表記）。

大正八年五月十八日・日本大学春季雄弁大会・「所感」¹⁰

大正八年十月五日・日本大学秋季予科学友会・「不良老年處分を論ず」¹¹

大正九年九月二十三日・日本大学雄弁会秋季大会・「日米問題ノ現在ト將來」¹²

大正九年十月十日・全国各大学連合雄弁大会・幹事として「開會の辭」¹³

大正九年十一月十四日・各大学専門学校連合雄弁大会・「大和民族を率ひて」¹⁴

大正十年二月五日・各大学専門校主催学生連合雄弁大会・「偶感」¹⁵

大正十年二月十三日・日本大学雄弁会春季雄弁例会・「動物と人間」¹⁶

大正十年五月一日・日本大学雄弁会春季雄弁大会・「人」¹⁷

大正十年十一月二十日・全国各大学専門学校学生連合大演説会・「創造の進化」¹⁸

以上から、世耕弘一先生は雄弁会では学内だけではなく、学外でも全国的によく知られた存在だったことが、分かる。そして、そこから、

前掲の「送別宴」で先生が自ら学生時代を振り返って「學生時代から三人前の仕事をやる主義であった」と言われているのは、学業・雄弁会等のクラブ活動・勤労の鼎立を保つ

て、充実した「學生時代」を過ごしたとの確信が語られているのも分かる。

更に、(3)については、世耕弘一先生が出身大学からの派遣留学生であり、また朝日新聞社からヨーロッパ滞在中に記事を送るのを委託されたことは既に触れた通りであるが、「文部省」に「関係してゐる」という意味は未だ十分には解明出来ていない。しかし、その点については、次のような史料を見出せていることを指摘しておきたい。昭和七年発行の『政友會總覽』収録「政友會代議士名鑑」の世耕弘一先生の欄¹⁹に、ドイツ留学と並んで「文部省ヨリ歐洲各國宗敎制度調査ヲ委嘱セラル」との注目すべき記述がある。

今後、文部省関係の一次史料を調査しなければならぬであろう。

それから、(4)については、先に掲げた朝日新聞本社『自大正十一年至大正十五年 社員異動簿

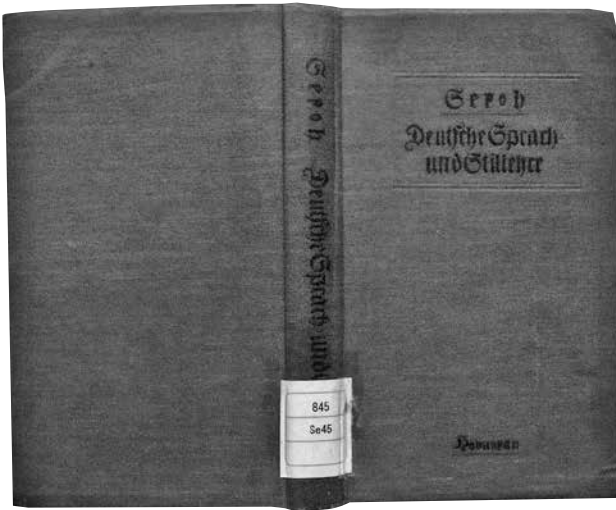
(大阪 東京)』の世耕弘一先生の項目にある「辭令」欄に「在歐中通信ヲ囑託ス」と記載されていることに呼応するのは、言うを俟たない。先生のドイツ留学の期間に相当する時期の朝日新聞に掲載されているドイツに関する記事を悉に点検しているが、先生の記名入り

「通信」は現在のところ発見出来ておらず、それは今後の課題にしたい。

2

本稿冒頭部で述べた如く、平成二十五年夏季休暇直前頃に史料展示会に展示する主たる史料の選定を完了したのであるが、その時点で『*Deutsche Sprache = und Stillehre*』
獨逸語並に文體論』の所在が確認出来ていたのは、国立国会図書館、北海学園大学附属図書館、日本大学総合学術情報センターの三館のみであった。その時点迄手段を尽くして本書の入手の努力をしたが、徒労であった。当然、本書はこの史料展示

会では展示出来ず、残念な思いをしたのであった。然るに、その後、本書（写真①参照）が本学中央図書館の書架に鎮座しているのを見出し、一驚を喫し、且つ重要な本書の名誉ある発見者となり得たことに歓喜した。同時に非常に不思議に思い、本書を書架から取り出して開いたところ、「表表紙」の見返しにある「受入印」に「2013.9.24」（写真②参照）とあるのを見出して、その疑問は氷解した。史料展示会の主たる展示史料を選定した平成二十五年夏季休暇直前から少し後の受入だったのである。「表表紙」の「遊び紙」には「不明氏寄贈」（写真②



写真①『*Deutsche Sprache = und Stillehre*』の「表紙」
獨逸語並に文體論』の「表紙」



写真②同書の「表表紙」の見返し」と「遊び紙」

参照)となつてゐることから、本学中央図書館への寄贈者、寄贈年月日や寄贈の経緯等は不明と、はじめて受入処理がなされたのが分かるに過ぎないということであろうか。

既に調査済の右記の三館所蔵の本書に比べても、本学中央図書館所蔵本の状態は遜色ない様である。本書は暗赤色のクロス表紙で、サイズは縦約十六・五センチ、横約九・五センチで、全三一頁である。「背表紙」及び「表表紙」にはドイツ文字の活字 (Frakturschrift) で著者名と書名 (現行のアルファベット表記する) と、Sekoh Deutsche Sprach = und Stillehre) (写真①参照) が印字されている。「扉」(写真③参照) にはドイツ語書名と日本語書名「*Sprache und Stillehre* 獨逸語並に文體論」、著者の肩書「日本大學講師」、著者名「世耕弘一」、発行社名「株式會社 寶文館」が印刷され

ている。「奥付」(写真④参照) には「昭和二年十二月五日印刷」、「昭和二年十二月十日發行」、「獨逸語並に文體論」、「定價一圓八十錢」等とあり、やや不鮮明ながら「世耕」の検印が認められる。ドイツ文字の活字及び日本語の活字併用の索引は十五頁にも及ぶ詳細なもので、それに依れば、前半部分は「語學」、後半部分は「文體論」となっており、本書の書名はこの構成から由来するのであろう。

世耕弘一先生のドイツ留学に関する史料としての本書で最も注目すべきは、その「はしがき」(写真⑤参照) であり、本書の脱稿時や場所、謝辞などが記されており、先生のドイツ留学の稀少な史料ともなっているからである。

「はしがき」の謝辞に記されている人物中の「ヘヤー・ポードー・ウイルケ」即ちポードー・ウイルケ氏とは、現在のところ、如何なる男性

かは不明なのであるが、「フロライン・ドクター・プリル」とは未婚の女性プリル (Pill) 博士という意味であるから、先に言及した「プリル教授」の「ベルリン大学へ入って後にドクターの学位をとった」二人の「娘さん達」²⁰の一人であると判断して、大過あるまい。また、「フラウ・クララ・ウイルデ氏」とは既婚女性のクララ・ウイルデさんという意味であるから、「ドイツ留学の憶い出」で言及されている下宿の、「フランス語も英語も話せる相当のインテリであった」ウイルデ家の「奥さん」²¹であろうと推測される。

本書の脱稿時や場所については、次のように記されている。

千九百二十七年の春

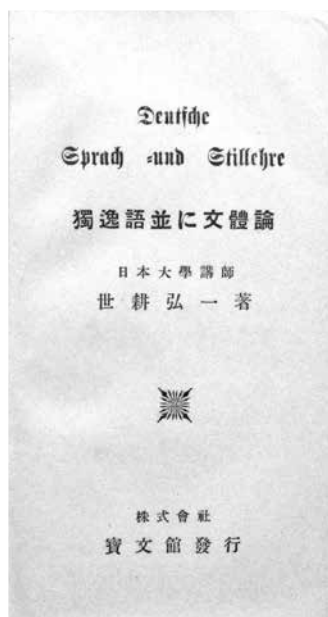
獨逸ベルリン・ヒンデンブルヒ街の

假の宿にて しるす

「獨逸ベルリン・ヒンデンブルヒ

街の假の宿」とは、既に言及した如く、「ドイツ留学の憶い出」で触れられている、ベルリン市ヒンデンブルク (Hindenburg) 街にあった下宿先の「ウイルデ」家である。また

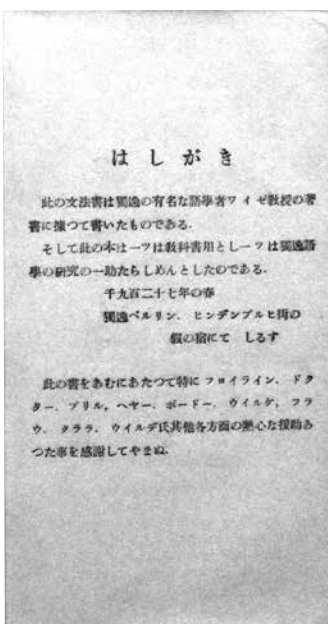
「千九百二十七年の春」と記載されているが、ここで言われる「春」は、立春(二月四日)から立夏(五月六日)までの期間を意味していると判断される。「ドイツ留学の憶い出」に於いて「日本に帰つたのは昭和二年二月、行くときは船であったが、帰りはシベリヤ鉄道でロシアを通つて帰つてきた。」²²と陳述されている。画家の八木熊次郎(一八八六一一九六九)の日記に依ると、八木は昭和二年二月十七日にベルリンを出発し、シベリヤ鉄道を利用して日本に向い、三月三日に下関に帰着している。²³つまり、この時点でシベリヤ鉄道を利用した場合、ベルリンから日本まで十五日ほどかかっている。故に、シベリヤ鉄道を利用して



写真③同書の「扉」



写真④同書の「奥付」



写真⑤同書の「はしがき」

二月中に帰国するには、遅くともベ
ルリンを同月十四日迄に発たねばな
らない。従って、世耕弘一先生は
一九二七年二月の後半に足掛け五年
ぶりに帰国されたと推測される。
尚、日本に於ける出入国業務に関す
る当時の現場の記録は、一般的には
定められた保存期間終了後に廃棄さ
れたようであるので、先生の正確な
帰国年月日等の確定は先生の旅券の
発見を待つしかないであろう。

以上から、本書が脱稿して、世耕
弘一先生が「はしがき」を書かれた
のは、一九二七年二月四日から同月
十三日位の間であるから、「送別宴」
のスピーチで留学の目標として掲げ
られた「語學」の研究が、本書の草
稿として、結実したのは、時益ちて
留学の終わる直前だったのであろう。

注

- 1 桜門文化人クラブ編『日本大学
七十年の人と歴史』第二卷(洋洋
社 昭和三十六年) 十二頁。以下、
本書は『日本大学七十年の人と歴
史』と略称する。
- 2 朝日新聞本社社史編修セン
ター(大阪)所蔵。
- 3 柳下宙子「戦前期の旅券の変遷」
(外務省外交史料館『外交史料館
報』第十二卷 平成十年) 四十頁。
- 4 外務省記録三門八類五綱八号
「海外旅券下付表」外務省外交史
料館所蔵。
- 5 大正十二年八月十三日付『日大
新聞 第三十三號』日本大学総合

学術情報センター所蔵。

- 6 長田源一編輯兼發行『^{東京}職業
別電話名簿』大正十一年版(日本
商工通信社 大正十一年) 東京之
部一三〇四頁。
- 7 『自由國民』第七号(時局月報
社 昭和二十二年) 十四頁。
- 8 『日本大学七十年の人と歴史』
第二卷十三・十四頁。
- 9 『日本大学七十年の人と歴史』
第二卷十四頁。
- 10 『日本法政新誌』第十六卷第六
号(日本法政學會發行 大正八年)
七十八頁。以下、本誌は『日本法
政新誌』と略称する。
- 11 『日本法政新誌』第十六卷第
十一号(大正八年) 九十六頁。
- 12 『日本法政新誌』第十七卷第十
号(大正九年) 九十九頁。
- 13 『日本法政新誌』第十七卷第
十一号(大正九年) 七十四頁。
- 14 『日本法政新誌』第十七卷第
十二号(大正九年) 一二五頁。
- 15 『日本法政新誌』第十八卷第四
号(大正十年) 一一七頁。
- 16 『日本法政新誌』第十八卷第四
号(大正十年) 一一八頁。
- 17 『日本法政新誌』第十八卷第六
号(大正十年) 九十七頁。
- 18 『日本法政新誌』第十八卷第
十二号(大正十年) 一七七頁。
- 19 山口英二郎編集兼發行『政友會
總覽』(政友會總覽編纂所 昭和
七年) 六十一頁。
- 20 『日本大学七十年の人と歴史』
第二卷十二頁。往時のドイツ語

では未婚女性はFraulein、既婚女
性はFrauと区別され、現在では
[Frau]に統一されているが、原典
を尊重して、原文通りにした。

- 21 『日本大学七十年の人と歴史』
第二卷十五頁。
- 22 『日本大学七十年の人と歴史』
第二卷十四頁。
- 23 八木彩霞著『彩筆を揮て欧亜を
縦横に』(文化書房 昭和五年)
四七一頁、四七六頁。昭和四年七
月に鉄道省運輸局が発行した『西
伯利經由歐州案内』(一頁)によ
れば、シベリア鉄道を利用すると
日本の「内地」とヨーロッパ主要

都市間は十四・十五日で済み、一
等車の場合の運賃は六〇〇円前後
であった(和田博文編『シベリア
鉄道』(『コレクシヨン・モダン
都市文化』第八十一卷 ゆまに書
房 平成二十四年) 収録)。

追記

今回の原稿を成す上で、関係史料
所蔵の諸機関に御高配頂いたことを
ここに記して、深謝したい。
原典尊重の観点から引用史料の表
現・漢字は、原則として、そのまま
にしている。

自校学習の取り組み事例報告

ー国際学部
平成二十八年度の場合ー

国際学部准教授

建学史料室研究員 酒匂 康裕

報告者は研究調査プロジェクト
「近畿大学の大学アーカイヴズと校
史関係史料の収集・整理に関する
調査・研究」(第一期、第二期)の
一環として行っている各地のアーカ
イヴズでの訪問調査を通じ、史資料
の収集、分類、整理、展示などの様々
な取り組み事例に触れることができ
た。

訪問調査時、いくつかの機関にお
いては、アーカイヴズと教育の連携

実践例として、研究成果を自校史教
育や自校学習へ活用する事例の紹介
も行われた。ここでは、学生が共通
開講科目として大学の歴史が学べる
よう、教員がオムニバス形式で講義
を担当したり、創立者のことばを集
めた冊子を自校史教育のテキストと
して使用するなど、様々な取り組み
があることが分かった。本学におい
ても新入生に『炎の人生』を配布す
るなどの取り組みがあるが、本事例
報告は、平成二十八年度の国際学部
における自校学習の取り組みを報告
するものである。

平成二十八年四月に本学十四番目
の学部としてスタートした国際学部
は、未来志向の「実学教育と人格の
陶冶」という本学の建学の精神を人
材養成の礎とした上で、グローバル

化というかつてないほど大きな社会の転換期を生き抜き、積極的にグローバル社会に参画するための知識と教養の吸収を目的とした教育を行う(国際学部ホームページより)学部である。特に、英語、中国語、韓国語の語学力を早期に習得することを目標に、学生全員が一年次後期より二年次前期にかけて留学を必修としている点が大きな特徴である。これは、近大生として入学し、半年後には留学生生活が始まり、近畿大学での学生生活に十分慣れる前に留学生活が始まることでもある。そのため、学生は留学前の準備として語学学習を行うと同時に、国際学部のカリキュラムとして行われる留学であることを認識し、さらには近大生としての自覚を持ちながら留学準備に取り組む必要がある。また、留学中には世界各地からの留学生や、留学先大学の学生との交流が行われることが想定される。この交流の中にはお互いの国や文化などの紹介のほか、在籍大学を紹介する機会があることも考えられる。

そこで、国際学部では基礎ゼミの時間に自校学習を留学準備の一環として取り入れ、「近畿大学を知る」というテーマのもと、合計二回(前期第二週と第三週)の授業を行った。国際学部の基礎ゼミでは学生に『基礎ゼミハンドブック』(写真参照)を配布し、各回定められた課題をもとに事前学習を行い、授業中には主に学生のグループワークを通じ



て内容確認や発展学習を行った。全二回のうち、一回目は近畿大学の創設者や歴史、建学の精神、教育の目的、大学の規模などの調査を事前学習として行い、授業中にはDVD『近畿大学のあゆみ・発展史』の視聴も行いながら、事前学習内容の確認をした。また、『炎の人生』を配布し、感想文をA4用紙二枚にまとめ、翌々週に提出する課題を与えた。二回目は東大阪キャンパス内にある主な施設(英語村、語学センター、KUDOS、中央図書館、不倒館など)の調査、場合によっては学生がこれら施設の訪問を行った。そして、合計二回の学習を通じた一つのまとめとして、「留学中に現地の人に近畿大学を紹介するとしたら、どの点を最もアピールしたいか」についてグループ内で話し合う機会を設けた。

今年度は国際学部発足に向けた準備段階より、多くの担当教職員が『基礎ゼミハンドブック』の制作に携わってきた。合計二回の「近畿大学を知る」取り組みが、現在留学中の学生にどのような意識づけがなされ、また実際に活かされているのか、今後、学生の帰国後に確認する必要がある。また、実際に授業を担当した教員からの意見を取り入れながら、学部内の教務委員を中心に次年度は改訂を行う予定である。

自校学習を基礎ゼミの時間に行うことは多くの学部で取り組まれていることであるが、国際学部においても学習内容は共通しているであろう。しかし、自校学習の内容を留学先にていかに発信するかを考えることは、学部の特徴に合わせた取り組みであると言えるかもしれない。

最後に、『炎の人生』の感想文のうち、報告者が担当した基礎ゼミの学生の承諾のもと、留学をキーワードに書いたと思われる文章の一部を紹介したい。ここには、約百年前と現代における留学に対する捉え方の違いと共通点などにも触れられており、大変興味深い。

1 まず何よりも世耕弘一先生の学びに対する熱い思いが印象的でした。学生が海外留学するのもそれほど珍しいことではなく、なってきたり、私も両親に高い費用を払って行って一年間も留学でき

ることが決まっていた、とても幸せなことだと思いました。そして、留学中には苦勞することも嫌になることも、日本にいるのと比べて多いだろうけど、その一年間を一瞬でも無駄にすることなく、いろんな経験をして、勉学に励み、一生懸命過ごすことが一番の親孝行だと、夢を実現させるために苦勞に苦勞を重ねて留学した世耕弘一先生の経験を聞いて改めて、実感しました。

2 学べるように支援してくれる家族にも感謝の気持ちでいっぱいです。学ぶことが普通になった現代に生きていると忘れがちですが、何かを学習できることは素晴らしいことです。それに加えて私は韓国への留学が決まっています。昔に比べてはるかに自分の学びたい学問が勉強でき、全員が留学できるといふ恵まれた環境にいます。その環境に甘えることなく探求心と積極性を失わずにやり遂げたいです。

3 当時、主任教授が世耕弘一先生にされたアドバイスは本にも書いてある通り、私も目からうろこの助言でした。「講義を、聴いてもよく分かるまい、本もたくさん読めるものではない。それよりもドイツをよく見ておくことだ。それにはまず語学、ドイツ語さえしっかりやっておけば、帰国してから

もドイツの本が読めるだろう。これが留学の秘訣だ」というアドバイスです。私は九月から韓国に留学するので、今韓国語を勉強しています。そのため、留学中は語学をまず身に付けていきたいとは考えていました。しかし、語学のことに気が向いてしまって国を見ておくということも忘れていました。講義の内容は帰国後に分かるとしても、国を見るときは留学中にしかできないことです。また実際知らない世界を自分の目で見ることで世界観が広がり、また視野が広がり、よりいろんな考え方ができるようになると聞いたことがあります。私は、留学に行くときそのことをきちんと肝に銘じながら留学を無駄にしないようなものになりたいと考えさせられました。

4 世耕弘一先生は留学によって異国から日本をなぐる経験をしたことで今までは違った価値観を持つて、世耕弘一先生にしか思いつかない大胆な発想をしたり、世界を見据えた発想をしていたのだと思うので、私も留学という貴重な体験を通して様々な価値観を持った人間になりたいと思いました。

寄贈紹介

世耕弘一先生直筆「近畿大学詩吟部」の幟(のぼり)旗

近畿大学文化会詩吟部ののぼり旗(段平)が、平成二十八年十一月二十二日、近畿大学文化会総務から学生部を通して寄贈されました。

世耕弘一先生の直筆が染め抜かれた「近畿大学詩吟部」と書かれたエンジ色ののぼり旗は、縦約三百四十七センチ、横約六十六センチで、フリンジと縁取りは金色で施されています。残念ながら「吟部」の二文字は長年の風雪に耐えられず、ほころびが目立っていますが、弘一先生の筆致は鮮明です。

校友の今井敏彦氏(昭和四十三年商経学部卒)によると、初代ののぼり旗は、昭和三十八年二月一日、総長室で弘一先生に書いていただいたもので、全国で大学詩吟部の活動が盛んだった当時、各大学が競ってのぼり旗を作成しましたが、直筆文字は珍しく、立派なものであったといえます。



寄贈された世耕弘一先生直筆の詩吟部ののぼり旗「近畿大学詩吟部」の一部。

長年、詩吟部と共に歴史を刻んできましたが、特にのぼり旗下部分の傷みが激しくなったことや、創立六十五周年に学園章とスクールカラーが変更されたことを機に、平成八年、新調されました。初代ののぼり旗は、その後も大切に保管され、このたびの寄贈に至りました。詩吟部は、昭和二十九年創部以来、六十余年にわたり活動してきましたが、現在は部員がいないため、一時休部しています。



平成八年に新調されたのぼり旗現在の学園章と近大ブルーに変わるも、弘一先生直筆の「近畿大学詩吟部」が見事に再現。

不倒館を訪れた方々

文芸学部芸術学科造形芸術専攻の三年生と四年生合わせて十一人が、平成二十八年十一月十日、岩岡浩二教授とともに、不倒館に訪れました。岩岡教授は、不倒館に展示中の「世耕弘一先生肖像画」「世耕政隆先生肖像画」の作者で、毎年、ゼミ生を不倒館にご案内くださっています。

岩岡ゼミ一行はこの日、中央図書館で開催中の「第二十三回貴重書展」を見学し、不倒館で近畿大学の歴史と弘一先生の生涯に触れた後、西門前の世耕弘一先生の銅像



文芸学部芸術学科造形芸術専攻 岩岡ゼミ3年生と4年生の皆さん

と、その傍らにある別館の石板（本誌二十二号十四頁『ご存じですか！「別館」の名残！』で紹介）を巡られました。

岩岡教授は、「不倒館が、西門と世耕弘一先生銅像の近くに移設されたことは大変意義があり、よかったです。より多くの学生や教職員に知っていただきたいですね」と話してくださいました。

◇ 翌日の十一日は、文芸学部芸術学科造形芸術専攻の一年生二十人が安起瑩教授、和田里花講師と共に、不倒館を訪れました。

安教授も毎年、ゼミ生と不倒館を訪れ、「ゼミ授業の理論や制作だけでなく、大学の文化や歴史的施設を



文芸学部芸術学科造形芸術専攻 安ゼミ1年生の皆さん



詩吟部校友の（写真右から）今井氏、松本氏、中島氏

体験し、知識を得ることも、学生たちにとってさまざまな刺激になります。不倒館の展示はデザイン側面でも参考になり、何より、岩岡先生の描かれた肖像画があることも造形専攻学生には大きな意味合いがあると思います。これもある意味、アクティブラーニングですね」と語られます。安教授の願いどおり、学生たちは岩岡教授の肖像画に興味津々で、不倒館に親近感が湧いたそうです。また、人力車での撮影はよい記念になり、毎年好評だということでした。

◇ 平成二十八年十二月十四日、本学文化会詩吟部校友の今井敏彦氏（昭和四十三年商経学部卒）、松本孝則氏（昭和四十四年商経学部卒）、中

島秀清氏（昭和四十九年理工学部卒）が、来訪されました。

このほど、文化会総務から学生部を通して寄贈された世耕弘一先生直筆の「近畿大学詩吟部」ののほり旗をご覧いただいた後、不倒館をご案内。

三氏は、「このような立派な記念室が、母校に設置されてうれいです」と在学当時に思いを馳せておられました。

今井氏からは、「近畿大学詩吟部」ののほり旗にまつわるエピソードや詩吟部活動当時の写真等、資料を多数ご提供いただきました。

△ご寄贈いただいた「近畿大学詩吟部」ののほり旗は、本誌十三頁で紹介しています。▽

不倒館入館者数の報告

平成二十一年九月に開設以来の不倒館入館者数を年度別で報告します。

| | |
|---------|--------|
| 平成二十一年度 | 一九五一人 |
| 平成二十二年度 | 二四四六人 |
| 平成二十三年度 | 二五七九人 |
| 平成二十四年度 | 二九七一人 |
| 平成二十五年度 | 四一七二人 |
| 平成二十六年度 | 三四八八人 |
| 平成二十七年 | 三〇六〇人 |
| 平成二十八年 | 一六九四人 |
| 平成二十九年 | 二月末現在 |
| 総数 | 二一九六八人 |

Twitter「不倒館(近大)」

「不倒館－創設者 世耕弘一先生記念室」は、Twitterを始めました。近畿大学の創設者である世耕弘一先生の残した言葉や、不倒館の各種お知らせを配信します。皆さんのフォローをお待ちしています。

URL <https://twitter.com/futoukan>
名前 不倒館(近大)
アカウント @futoukan

